

第四期国語読本所収教材における「読み」の位相 —紀行文「「あじあ」に乗りて」を巡って—

山本 康治*

The Aspects of “Reading” in the Teaching Materials of the Fourth Japanese Elementary School Textbook
— Focusing on “Riding the Limited Express ‘Asia’ ” —

Koji YAMAMOTO*

Abstract

The purpose of this study is to analyze and investigate a travelogue included in the fourth series of national elementary school reader books published during the Showa period. This travelogue had an original draft, but it was modified. There were two key points of modification: first, the removal of events unfamiliar to Japanese children; second, the description of the protagonist's feelings of longing for his mother. These changes were intended to foster an empathetic understanding among Japanese children toward the “Manchukuo” state. However, many teachers in Japan were not empathetic to the Japanese people living in the “Manchukuo” state.

Keywords : National Reader, Lyricism, Discrimination

1. はじめに

第四期国定教科書「小学国語読本」（通称、「サクラ読本」）は、1933（昭和8）年から逐次刊行され、1939（昭和14）年には、全12巻が揃うことになった。大正期に刊行された第三期国定教科書「尋常小学国語読本」は、既に10年以上使用され、時代に合わなくなったとの指摘も相次いでおり、「小学国語読本」は待ちに待った新しい教科書であった。

「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」で始まり、単語レベルではなく、文章レベルのセンテンスメソッドを採用した「小学国語読本」は、表紙や挿絵がカラー刷りとなったことも相俟って、児童や教師から好感を以て受け入れられた。編集の方針、特徴については既に指摘されているように、これまで以上に文学的教材の比率が高いことが挙げられる。ただし、大正デモクラシーの影響下のもと編纂された第三期国定教科書とは異なり、題材には、神話・昔話、伝説といった日本の伝統的な内容、また、軍事的内容及び植民地に関する内容を持つ教材を見ることができる。

このような傾向は当時の日本が置かれていた国際情勢、政治状況等が反映したものと言える。1931（昭和6）年9月の柳条湖事件を契機として、満州事変が勃発し、1932（昭和7）年3月に傀儡国家として「満州国」が建国される。その過程では国際連盟からの脱退により国際的に孤立を高めていくのだが、日本国内では、そのよう

な状況は認識されず、官製プロパガンダのもと、その状況は肯定的に受け入れられていった。このことは、教育現場にも直截に反映しており、日々の教育活動のみならず、教育内容そのものにもその影響は見られ、「小学国語読本」においては、植民地を対象にした教材、軍事教材として顕在化することとなった。

「小学国語読本」に収められた、植民地を含む海外を題材にした教材は、11篇。いずれも巻八以降の教科書に収められており、小学4年生以降の使用が想定されている。11篇のうち、欧米を題材にした、「ホノル、の一日」（巻八）、「アメリカだより」（巻九）、「欧州航路」（巻十一）、「欧州めぐり」（巻十二）の4篇以外の7篇は、当時、日本の植民地であった「朝鮮」「中国」「満州」「南洋諸島」に題材を得た教材で、中でも「満州」教材は、「大連だより」（巻八）、「朝の大連日本橋」（同）、「「あじあ」に乗りて」（巻十）の3篇が採録されており、重きが置かれていたことが伺える。^{*1}

これら3篇は、いずれも満州国の港湾都市大連に関わるものである。「大連だより」は、日本の小学校から大連の日本人小学校に転勤した教師から、日本での教え子に向けての手紙文で、大連での生活の様子が伝えられる。また、詩篇「朝の大連日本橋」では、大連の朝の出勤、通学で人の行き交う、活気あふれる日常の朝の場面で、疲れ切った現地人との対比を交えて描写される。さらに「「あじあ」に乗りて」では、大連からハルピンまで、尋常小学校四年生の児童が1人で「叔父」を訪ねて旅をす

*東海大学児童教育学部

る紀行文となっている。

これらは満州国の様子を伝えるものとしての役割を担っていた。原案はすべて、当時満州に生活していた石森延男によるもので、文部省から依頼を受けての作成であった。これらいわゆる「満州教材」は石森からの原案（以下、「石森原案」）を元に、「小学国語読本」に改稿（改変）されて収められたものである（以下、「国定読本版」）。「満州教材」のうち、既に、「朝の大連日本橋」については、「石森原案」から「国定教科書版」への改変の分析を通して、植民地の持つ支配－被支配の構図が無自覚に描き込まれていったことを指摘した。¹⁾ 本稿では、「石森原案」をもとに1937（昭和12）年に「小学国語読本」巻十第二十六に収められた「「あじあ」に乗りて」に焦点をあて、「石森原案」と「国定読本版」との比較、「石森原案」生成過程の検証を通して、どのように教材「「あじあ」に乗りて」が生成され、またそれに対する日本国内、特に小学校教育現場からの眼差しはどのようなものであったのかについて検証する。このことを通して、当時の学校教育における植民地教育の一端を明らかにしたい。

2. 教材「「あじあ」に乗りて」の概要

「「あじあ」に乗りて」（「国定読本版」）は、尋常小学校5年生とおぼしき男子児童「僕」が主人公となった紀行文である。あらすじは次の通りである。

「僕」は、叔父に会うため、春休みに一人で南満州鉄道株式会社（満鉄）の新型特急「あじあ」に乗って、居住地・大連からハルビンまで向かう。大連発9時、ハルビン到着21時半のおよそ12時間半にわたる単独行である。母の見送りを受け、大連駅を定刻通り出発し、車窓には「大和尚山」、「乃木勝典中尉記念碑」、「金州城」が見え、「僕」による簡単な紹介がなされる。沿線の楊の木に掛かる「かさゝぎ」の巣のことを話したことをきっかけに、母と同乗しているロシア人の娘マルタと仲良くなる。この母子と食堂車へ入り、車窓から見える「望小山」の伝説（亡くなった子の帰りを待つ母の話）を伝える。「大石橋」で始めて停車の後、車窓から見える、「鞍山の製鋼所」、「遼陽の白塔」、「太子河」といった名所の説明をする。「奉天」到着。ここでは兵隊が乗り込んでくる。街の様子を紹介し、「北陵の松林」、「大平野」等を経て、「四平街」に着く。次の停車場の首都「新京」に近づくにつれて、車窓から「満州国旗」、国務院、関東軍司令部の建物、新しい住宅、街路樹などが見える。「新京」では、兵隊たちが下車し、マルタとその母も下車する。夕刻に入り、赤い夕陽が沈む場面が描かれる。鳥の群、薄紫の夕空を眺めながら、母を思い出す。食堂に入り、ロシア少女の給仕を受け、母への手紙を書き、しばし眠る。ハルビン駅到着後、叔父の出迎えを受ける。以上、「小学国語読本」13頁にわたる紀行文である。

特急あじあ号は、1934（昭和9）年11月に大連から新京（満州国首都、現在の長春）間で南満州鉄道株式会社

により運行が開始され、翌年9月にはハルビンまで区間が延長された新造特急である。冷暖房の空調が入り、防音対策もされ、当時の鉄道技術の粋を集めた特急車両であった。

この教材の成立経緯については、当時の文部省図書監修官であった井上赳が次のように明らかにしている。「この教材は、大連にゐられる石森延男氏にお願いして原案を作成して頂いたものである。同氏の児童文学に造詣の深いことは、ここに私のいふまでもないことであるが、この一篇にしても、常に主として子供の興味となるものが表現の対象となつてゐる。沿線のかさゝぎの巣や、望小山の伝統や、「あじあ」のスタンプや、兵隊さんの話や、すべて大人から言へば取るに足らぬことで、しかも子供には重大な興味である。更に、ロシア少女マルタとの交渉や、別れた母を、思ひ出したやうになつかしがる心理が、この一篇をりつばな創作品たらしめてゐる」²⁾

石森延男は、1897（明治30）年、札幌生まれ。東京高等師範学校第二部国語国文科を卒業後、中学校、師範学校の国語教師を経て、1927（昭和2）年に渡満し、大連の南満州教育会教科書編輯部に勤務し、満州補充読本の編集・改訂を担当した。併せて、満州を題材にした児童向けの童話、物語を多く発表した。現在、北海道立文学館には、石森自身の手による「石森延男スクラップ帳」（全89冊）が所蔵されており、そのうち「No.52～No.58」の7冊が満州編となっている。「No.53」に残された「原文対照国語読本の教材」には、「石森原案」と「国定教科書版」の双方が掲げられており、「国定読本版」との異同を確認することかできる。^{*2}

3. 「石森原案」から「国定読本版」への改変

「石森原案」から「国定読本版」への改変一覧（主なもの）

- ①「あじあ」号の運航時刻の変更。
- ②「百合の花」の描写の削除。
- ③「英国皇帝戴冠式」拝観の団体についての記述の削除。
- ④「あじあ」の速度、全長についての説明の削除。
- ⑤「かさゝぎ」の巣の描写の修正。
- ⑥「得利寺」「露国兵の墓地」を通った時のマルタ叫び、「温泉」のやりとりを削除。
- ⑦「大石橋」停車の際、車外に出てマルタに話す「迷鎮山」と「ふしぎな伝説」の削除。
- ⑧「鞍山の製鉄所」の描写の修正。
- ⑨「太子河はめづらしく水かさが多いが、いつもの濁流だ。」といった描写の削除。
- ⑩「奉天」の街の様子描写の削除。
- ⑪「あじあ」号の描写の際の比喩表現の削除。
- ⑫「ハルビン」からの「あじあ」とのすれ違い、淡緑、白線、空、青天白日旗は削除。
- ⑬「満人たちへほんやりこちらを眺めていた」のうち、「ほんやり」を削除。
- ⑭「マルタ」との別れの場面の削除・修正。

⑮「新京」から乗ってきた「知つてゐるおぢさん」の話した内容の削除。

改変の多くは、描写、事項の削除であり、満州国の紹介ともいべき役割を担った箇所（③～⑬、⑮）が中心である。また抒情表現の場面の削除、修正も目に付く（②、⑭）。削除の有無にかかわらず、「石森原案」に示される名所旧跡については、石森が南満州教育会教科書編集部で携わっていた、「満州補充読本」を踏まえたものである。「満州補充読本」は、1924（大正13）年から1931（昭和6）年にかけて、改訂版が同1931（昭和6）年から1936（昭和11）年まで出版された、満州在住の日本人小学校教育児童向けの副読本である。国定読本に載せられていない、満州の地理、風俗、伝説等が収められており、満州の日本人小学校教育では、「おもに国定教科書を用いながら、併せて『満州補充読本』が積極的に用いられた」。³

実際、「僕」は、「望小山」の伝説をマルタに話すなど、学校で「満州補充読本」で学んでいることを前提として紀行文は記されている。石森にとっては、日本の子どもたちに、「満州国」とはどのような国であるのかについて、路線の名所旧跡の紹介を中心に記した紀行文ということになろう。国定読本に収められる際には、地名、名所旧跡の描写を減少させる形で手が入ったのである。以下、「満州補充読本」にも視野に広げ、「石森原案」から何が削除・修正されたのかについて見ていきたい。

①については、「国定読本版」が出された1932（昭和12）年では、「あじあ」の発車時刻が「十時大連発」から「九時大連発」と1時間繰り上がったため、「国定読本版」ではそれに合わせての変更ということになる。これによりハルビン到着時刻も「二十一時半」に修正された。

③については、「英国皇帝戴冠式」へ向かう「何処かの団体の人たち」の一節が削除された。「英国皇帝戴冠式」は、1937（昭和12）年5月12日にロンドンにてジョージ6世の即位として行われた。ただ、この紀行文の設定である「春休み」からは時期がずれており、石森としては、満州国が欧州を結ぶ国際的な経路として重要であることを示すために挿入したのであろうか。なお、「石森原案」では、この一団は「新京」で下車すると述べられるが、当然のことながら「国定読本版」ではこちらも削除されている。

④は、図書監修官・井上赳（前出）が、本教材は「「あじあ」を書くのが目的ではなく「あじあ」から見る満州が目的である。」³⁾と述べていることから、特急「あじあ」自体の説明については削除したということであろう。

⑤は、車窓に見える、「かさゝぎの巣」についての叙述である。ここでの会話をきっかけに「僕」とマルタの交流が生まれるのだが、この場面については「石森原案」に先立ち、「満州補充読本」（改訂版三の巻二十三「おかあさんへ」）に原形が見られる。これは母親への書簡の体裁を取った紀行文で、小学生児童がひとりで汽車に乗

り、「をばさん」の待つ「安東駅」へ行く話である。「「あじあ」に乗りて」の設定と類似した内容である。また、冒頭にロシア人親子が出て来る点にもモチーフ上の類似が見られる。さらに、車窓から「やなぎの木にかけたかさゝぎの巣がよく目につきました。一つ二つと見つけしだいにかぞへて来たのですが、あんまりたくさんあるので、やめてしまひました。」とあるが、これも「石森原案」では「あの鵲の巣を数へてるのさ。」として引き継がれている。ちなみに「国定読本版」では、この箇所は「あのかさゝぎの巣をみてゐるのさ。」に変えられている。

⑥は、マルタとの交流のうち、マルタが叫んだ、日露戦争で戦死した兵士の墓地の描写の削除である。車窓から見える「望小山」について、「僕」はマルタにその伝説を語るのであるが、その内容は、故郷を出て勉学に励み立身出世した息子の帰りを待つ母の話で、息子は帰郷の途上で遭難してしまい、それを知らない母はいつまでも息子の帰りを待ちわびていたという話である。これは「満州補充読本」（改訂版三の巻十一「望小山」）に述べられた「伝説」が下敷きになっている。母の情という点で、「僕」の母への思慕の情にもつながる場面であり、その部分だけは削除されないで残されたことに注意したい。

⑦は、初めて停車する「大石橋」で「僕」がマルタに話す「伝説」の削除である。「国定読本版」では、「僕」1人がホームに出たことになっており、特段の描写は見られない。「石森原案」では、マルタと一緒にホームに出て、「あの山なんといふ名でせうか。」と問いかけるマルタに対して、「あれは迷鎮山、頂上に廟が見えるだらう。あの廟の祭が娘々祭といつて満州では一ばん賑かで、その時はあの山いつばい着かざつた人で埋つてしまふ。」と、「この廟についての不思議な伝説を話してきかせた。」となっている。「娘々祭」については、「満州補充読本」（改訂版三の巻七「娘々廟」）に記載がある。若者が、塩を運ぶ荷馬車に三人の娘たちを乗せ、大石橋まで行くが、そこで娘たちに後光が差し、天に昇っていくという「不思議な」話であり、「石森原案」ではこの場面が下敷きになっていることが分かる。満州の地方伝説であるが、「国定教科書版」では削除された。

⑧「鞍山の製鉄所」での件では、「石森原案」にあった「国防上大事な仕事をしてゐる鞍山の昭和製鋼所」は、「国防上～」のくぐりと製鉄所名「昭和」が削除されている。一方、「石森原案」で「茶色の煙がたちのぼり焰も見えていかにも勇ましい工場だ。」と形容された同製鉄所は、「満州補充読本」（五の巻十四「鞍山製鉄所遠望」）の一節「こげ茶の煙がもく／＼だ」を踏まえた表現であろう。この箇所、「国定読本版」では、「鞍山の製鉄所から茶色の煙が立ちのぼり、遼陽の白塔が眺められた。」とされている。

⑨は「太子河」の描写についての削除である。「石森原案」では、「太子河はめずらしく水かさが多いが、いつもの濁流だ。」との一節があり、「めずらしく」「いつ

もの」といった記述からは、「僕」にとってはこの場が既知の場であることが示されている。「僕」は、「満州補充読本」での学びを踏まえ、満州の地理、逸話に詳しい小学生として造形されているものの、初見の実景に対する眼差しとしては不適切である。この項については、「石森原案」には、「青字タイプ版」（北海道立文学館蔵）も残されており、そこでは鉛筆書きで校訂がなされている。そこでは「太子河」は、「青字タイプ版」では、「遼河」となっており、それが鉛筆にて「太子河」に改められている。「太子河」は、「遼河」の支流であることから、書き改められたということであろうが、この「遼河」については、「満州補充読本」（改訂版五の巻三「鴨緑江」）において、「大海のやうな遼河の濁流の中に、しっかりと銃を握ってゐる。」との一節を見ることができ、「太子河」（遼河）の様子についても、「満州補充読本」での記述が下敷きになっていることが分かる。

⑩は、「奉天」の街の様子描写の削除。「日かげの所々に雪が消え残つてゐる。」「満州事変の北大宮の跡がそのまゝに残つてゐるのも車窓からよく見える。」は削除。後者については、時事的な話題を避けたためであろうか。

⑪は、「「あじあ」は～満州の背骨をまつしぐらに突進する。どこかの大学生がカメラを持つて来て、車内から外をねらつてゐる。」のうち、「の背骨」と記述と、「カメラを持つ」た大学生の話が削除される。「満州の背骨」は、『綴方満洲』（昭和15年6月、（南満州鉄道株式会社鉄道総局等編）修学館）を始め、他にも散見される表現である。

⑫は、「開原の駅」でのハルビンからの「あじあ」号とのすれ違いについて、「淡緑に白線の車体が向かふのスロープをカーブして行く。なんと美しい線と速度であらう。」と美しさについて述べている。続けて「空はすっかり晴れ上つた。友邦中華民国の青天白日旗が思はれた。」は削除。「石森原案」では、前項⑪で削除された、「カメラ持つて来て、車内から外をねらっている」、その被写体として「美しい」「あじあ」の叙述につなげようとしていたようであるが、このような審美的な観点は「国定読本版」では削除されている。

⑬では、「満人たち～ほんやりこちらを眺めていた」のうち、「ほんやり」が削除される。

⑭「新京」から乗ってきた「知つてゐるおぢさん」からの話、「鉄道愛護村」の話、削除。ハルビン到着直前に「おじさん」の話す「あじあ」の意味、「志士の碑」「伊藤博文公の斃れた場所」については削除された。

このように「石森原案」の百花繚乱的な「満州」紹介に対して、「国定読本版」では、内地日本の児童が受容できる点に対象が絞り込まれていったことが分かる。主人公「僕」は、『満州補充読本』で紹介された満州の遺跡、事象には詳しいが、そのような背景を持たない内地日本の子どもに対する教材として考えた場合、叙述対象を絞

り込んで焦点化させる必要があり、叙述対象として残されたものには、その必然性がなければならなかったと推察できる。^{*4}

一方、②、⑭については、抒情的な表現の場面ではあるが、「国定読本版」では削除、修正される。②では、3度出て来る、客車内の「百合の花」の描写が「国定読本版」では、すべて削除される。「植木鉢には百合の花が咲いて、ゆらゆらゆれながら「ようこそ。」と迎へてゐるやうだ。」との描写は、旅の終盤、夕食を済ませて眠くなつてきた「僕」には、「百合の花はやつぱりこくり〜とゆり動かしてゐる。」と目に映り、終着のハルビンに入ると「百合の花は「さよなら、おやすみなさい。」をしてゐる。」と述べられる。擬人化された「百合の花」との〈対話〉ともいふべき挿話だが、この一連の挿話は、「国定読本版」では、すべて削除されている。

⑭は、マルタとの別れの場面の削除、修正である。「石森原案」では、「マルタも下りていった。渡英団体の人たちも下車したので、車内はさびしくなつた。マルタは僕を見送るといふ。母がしきりにマルタに話しかけては僕を見上げるのだが、何をいつてゐるのかわからない。」が、大幅に削除され、「マルタもおかあさんと一しよに下りていった。急に車内がさびしくなる。「さようなら。」「さようなら。」マルタは、飛上りながら手を振つた。」といった記述となっている。どちらも「僕」の同行者がいなくなる場面が「さびしさ」とともに描かれるが、「国定読本版」で削除されたのは、マルタの別れを惜しむ姿の描写であり、「僕」の心情自体は「急に車内がさびしくなる。」とむしろ強調される書きぶりである。

冒頭の母の見送り、母の愛情を示した「望小山」の伝説、日没に向かう車窓からの景観から母を思い出す場面、母へのはがきの発信等、「国定読本版」への改変は、「石森原案」から情的な部分すべてが除外されたのではなく、「僕」の母への思慕という情的な思いは継続的に、かつ満州の景観と照応しながら、いわば主調低音としてつなげられていることに注意したい。抒情的場面については、「母への思慕」から外れた諸事が削除されていったと言えるだろう。

宇賀神一は、「国定教科書版」を成す際、「叙情表現＝登場人物の心情を取り除く操作」がなされたと見て、そのような操作の意図を小学三年生までは「感情叙述」、四年生以上では「知的表現のもの」とする井上越の発言を取り上げて紹介しているが、⁴⁾「叙情表現」は一律削除されたのではなく、むしろ「僕」の母への慕情を浮き上がらせるように、母への思慕に回収できない逸話や描写については整理されたのではないだろうか。つまり、焦点化される人物を絞り込むための、登場人物やここに回収できない逸話について削除と見なすことができる。

1938（昭和13）年2月の「教育研究」には、東京高等師範学校附属小学校国語研究部の教員による教材研究の座談会が収められている。その中で、佐藤末吉は「「あ

じあ」に乗りて」について、次のように述べている。

子供の一人旅だから、やはり母を憶ふ、母を中心として一種の旅情といふ様なものが漂つて居る。はじめに母が見送ってくれるし、それに連関して望小山の物語り、さきに進んでは薄紫の夕空にはばら色の細かい雲がたなびいた、それを見てゐたら、母を思ひ出した。」といふ様な旅情をそこへ出してある。それにマルタのお母さんなども絡つて居る、沿道の景観、見聞といふ様なものは余り感じが出て居ない。又さういふものを書くときから次へ同じ様なものが出て来て中々むづかしいでせうね。」⁵⁾

ここで述べられているように、母への思慕の想い、「母を中心として一種の旅情といふようなもの」をプロットとして読み取っていくと、確かに、「沿道の景観、見聞」を実感をもって読み取ることは難しいだろう。「国定読本版」にされる際にいくつかの「景観」が削除されたことで、多くの名所旧跡、事象の描写から満州を遍く紹介しようとした「石森原案」の意図は十分に汲み取られなかったことになる。ただし、「景観」と母への想いが交錯する描写もある。夕暮れに向かう描写、「日が沈むところだ。大きくて紅くて上海蜜柑のやうだ。夕日と僕との間にはさへぎるもの一つない。明日またお日さまごきげんよう。鳥の群れが地上から飛上つた。うす紫の夕空にばら色の細い雲がたなびいた。それを見てゐたら母を思ひ出した。そしてもうしばらく別れてゐるやうな気がした。(略)大きな樹の上に星が光つてゐた。」

このように「国定読本版」では、母への思慕に焦点を絞り、景観描写も減じることで「内地」の子どもの理解に適する方向を目指して整えられたと見てよいだろう。

4. 「僕」の造形を巡って

「僕」の造形については、内地の子どもの違いが指摘される。井上越は「尋常五年の子供で、而も一人で大連からハルビンまで行くことは内地では考へられないが、植民地の少々大胆な進取的な、国際的な環境に育つと、かういふ子供もあり得る」として、「内地」の子どもの違いを指摘する。⁶⁾ また、1937(昭和12)年10月の雑誌「国語教育」の「研究座談会」では、「これは大連の子供が、大体汽車に乗つてハルビンまで行く」と云ふ型に出来て居るのであつて、日本内地にすれば非常に大胆なようなことになります、幾分植民地の進取的な国際的な精神から云ふと、寧ろこれを当然と見てよからうと思うです。」という発言を見ることができる。また同月、芦田恵之助はその著『小学国語読本と教壇』の中で、「第一に異様に感じるのは、子供にしては太つたといふことだ。これは内地にばかりゐて、児童を幼弱に見ることに慣れてゐる者の考へることで、多少でも植民地にあるいてみた者ならば、これ位なことは、あまりにも当然すぎると感ずることだ。大人でも、内地にのみゐると、異民族の間に身をおくのとは、平常の心構がちが

ふ。」⁷⁾と述べる。東京高等師範学校附属小学校の教材研究座談会(前出)では、「(水島)この教材に出て居る子供は非常に進取的で屈託のない、植民地の子供だから、内地の子供と比較して考へると多少様子の變つたところがある様ですが、それは新開地に育つた子供として当然であらうかと思ふ。」⁸⁾と述べている。

全体的には、「僕」の行動を肯定してはいるもの、「植民地の少々大胆な進取的な、国際的な環境」、「幾分植民地の進取的な国際的な精神」、「異様に感じる」「異民族の間に身をおく」「多少様子の變つたところがある」等の表現からは、排他的ともいえる眼差しを感じ取ることができる。「僕」に対しては、日本「内地」の子どもに対するような共感的態度ではなく、それとは異なる「他者」に対する認識を以て向き合っているのである。これは満州在住の日本人においても同様で、満州の子どもは「内地」の子どもと違っていることに極めて自覚的であった。1931(昭和6)年12月に出版された「満州補充読本」(改訂版一の巻)の巻頭教材「マンシウ」には、「ソラ ノ ウツクシイ マンシウ。／ヒロビロ ト シタ マンシウ。／ワタクシ ドモ ハ／マンシウ ノ／コドモ デス。」とあり、青い空をバックにした緑豊かな樹木のもとにひつじが川を渡っている挿絵と相俟って、インパクトを持った巻頭教材となっている。そのような自負ともとれる「ワタクシドモハ／マンシウ ノ／コドモ」といった「宣言」は、必然、日本「内地」の子どもとは自ら違った存在であることを宣言しているものであり、それが満州に住む大人たちの認識であったと見てよいだろう。

このように満州在住の子どもも、日本「内地」で育った子どもも、ともに異なる「他者」として認知されていたことが分かる。

5. 「満州」への二重のまなざし

第四期「小学国語読本」には、冒頭でも述べたように、「満州教材」として、「大連だより」(巻八)、「朝の大連日本橋」(同)、「あじあ」に乗りて」(巻十)の3篇が収められており、これらが、新しく「建国」された「満州国」を子どもたちに認知させる役割を担っていたことは想像に難くない。国内で学校教育に携わった者たちはこのような状況をどのように捉えていたのであろうか。

秋田喜三郎は、「大連よりハルビンまで汽車旅行させる作者の文を読ませて、沿線の地理を中心として満州国を認識せしめ、列車内の国際的常識を得させることが主眼である。」⁹⁾として、「国際的常識」を身につける教材としての役割を見ている。宮川菊芳は「本文は、満州への認識を深くする一機縁として、大きな使命を持つものである。恐らく文部当局としても、それらの事を考慮に入れつゝ、此の文を採択したものと思はれる。」¹⁰⁾と、当局の意図を汲んだ、「満州への認識」を深める「大きな使命」を持った教材と高く評価している。このように「満州国」に対する表面的な賛辞が見られる一方で「満

州国」に対する眼差しには揺れが見られる。芦田恵之助は「この教材の陰にひそめてある諸問題」として、「植民地に育つものの心構へ」¹¹⁾の違いを指摘しているが、坂本豊も、「作者は植民地的な大胆さと幾分粗削で進取的な所があり、国際文化的な気性が現れてゐる。」とし、「かういふ気分のする文章は内地にある人には作れない。(略)小さく狭く出来た内地人に感化させたい。」¹²⁾と、「内地人」とは「異なる」存在として、つまり「他者」として在満州の日本人を位置づける。また、東京高等師範学校附属小学校の国語研究部での座談会では、「(小林)向かうの人は考へ方が内地の人とは全く違つて居る、その点スケールが大きいからでせうね。(略)とにかく一歩外へ出てみても一望無限だからスケールが違ふ、だから観念まで変つて来るらしい。」¹³⁾との発言が見られる。

「満州国」に対する言説には、「国際的」「大胆さ」「進取的」「一望無限」と賞揚する言辭が付される一方で、「植民地で育つもの」「考へ方が(略)全く違つて居る」と「内地」の国民との「違い」を顕在化する言辭が付きまとっている。これらはいわば「異なる他者」に対する眼差しと言っていいだろう。「五族共栄」と言い、表向きには共存発展を標榜しながら、実質的には「支配－被支配」の関係のもと、植民地としての「満州国」の置かれた状況が直截に示されていると言ってよいだろう。賞揚されつつも、「異なる他者」として峻別される二重性が、これら教師たちの言説に見え隠れしているのである。「あじあに乗りて」は、「国定読本版」において、名所旧跡の削除や、また「母への思慕」にモチーフを収斂させることで、「内地」の子どもに受け入れられやすい方向で手が加えられたが、「異なる他者」と位置付けられる「僕」、満州」に対する教師たちの認識は変わることはなく、その教師たちのもとで進められる「読み」のありようは、当然子どもたちの認識に色濃く反映していったと見てよいだろう。

6. おわりに

昭和十年代の学校教育において「植民地」がどのように認識され、子どもたちは何を学んでいったのかという問いに対して、教材「あじあに乗りて」の生成過程とそれを取り巻く言説の分析を行った。「原案」を成した石森延男の思いとはまた違った観点で「改変」が行われ、日本在住の子どもを対象に、植民地としての「満州」像を教え示す内容となったことを明らかにした。

満州在住の日本人と内地在住の日本人とでは、意識のギャップが生れてきていることは既に指摘されている。当時の満州で生活をしていただた人たちの回想録からそのことを知ることができる。

満州の現実をみていながら興味も不審も関心も持たず、日本の都合だけを考える人間に出来上がるか、満州の現実を深く知ろうとしてそこに心をそそぐ人間が出来上がるか、その境い目に彼らはいつの間に

か立つようになるのではありませんか?／満州の日本の役所は、彼らの子弟の欠陥?を補うのに、日本の国定教科書のほかに「満州補充読本」を作って、少しでもそれを埋めようとしてしました。(略)日本のことだけを考え他をかえりみない日本人と、満州のことを日本のふるさとと同じように考えずにはおられない日本人がここに分化して誕生し始めていることであり、それに気づかなければならないことなのであります。¹⁴⁾

さらに「国内しか知らぬ日本人、極端に言えば郷里から一歩も外に出たことのない日本人は、満州に行くものを侮る場合さえあるのです。仕事にあぶれた食いつめ者と冷笑視する傾向はいつまでも消えない極めて根深い偏見でありました。」¹⁵⁾という状況に行きつく。教材「あじあに乗りて」は、読者に、「僕」の、母への想いに遍く共感させる方向性を持ちながらも、一方では、「僕」を異質な存在として外化させるといった二重性を持ったものであり、その裂け目を晒したまま、子どもたちに受け入れられていったのである。この裂け目については、当然、「被支配」の立場に置かれていた現地の人々に対する眼差しにも大きく関わるものである。この点については改めて考察を進めたい。

引用文献

- 1) 山本康治：第四期国語読本所収詩篇における「読み」の交流「朝の大連日本橋」を巡って（東海大学児童教育学部紀要），東海大学児童教育学部，2024. 3
- 2) 井上越：『小学国語読本総合研究巻十』（国語教育学会編），岩波書店，1937. 8
- 3) 2) と同じ。
- 4) 宇賀神一：『石森延男研究序説』，風間書房，2022. 2
- 5) 国語研究部：「新読本巻十教材研究座談会記録」，「教育研究」，1938. 2
- 6) 2) と同じ。
- 7) 芦田恵之助：『小学国語読本と教壇』，同志同行社，1937. 10
- 8) 5) と同じ。
- 9) 秋田喜三郎：『小学国語読本指導書尋常科用巻十』，明治図書，1937. 9
- 10) 宮川菊芳：『小学国語読本解説尋常科用巻十』，明治図書，1937. 7
- 11) 7) と同じ。
- 12) 坂本豊：『実力成長小学国語読本の教授尋常科用巻十』，明治図書，1937. 11
- 13) 5) と同じ。
- 14) 満州日本人四十年心史研究会：『かなしみの花と火と』，満州日本人四十年心史研究会，1993. 7
- 15) 14) と同じ。

注

- *1 他には、「京城へ」（巻九）、「南洋だより」（巻十）、「朝鮮の田舎」（同）、「支那の印象」（巻十二）の4篇。
- *2 『原文対照 国語読本の教材』「序に代へて」（大連大広場校 板東久松）には次のようにある。「私の学校で、小学国語読本巻十二の「北京見学」（稿者注：「志那の印象」）

を教へようといふ日に、北京新民学院の山口喜一郎先生が大連に見えたので、先生に此の課を教へていたゞいて、仲間が大勢で見せてもらひ、後で先生の御授業を中心に、色々話し合ひをいたしました。原文の作者である石森先生も見えてゐました。其の時「原文が見たいなあ」と言ふ声がしきりに出ました。「当地の子供には、原文の方がびつたりひびくやうだ」との声も出ました。こんなことが動機で、石森先生から他の三篇の原文もお借りして、大連市役所学務課の御厚意によつて、本文と対照して活字にしたのが此の冊子です。」

- *3 「満州補充読本」のうち、「「あじあ」に乗りて」の描写に関わる教材を示す。「金州」、「大和尚山」（改訂版六の巻九「林間学舎日記」、改訂版五の巻十一「空の旅」、改訂版三の巻十八「唐王殿」）／「熊岳城」「望小山」（改訂版三の巻十一「望小山」）／「迷鎮山」「石森原案」のみ（改訂版三の巻七「娘々廟」）／「鞍山の製鋼所」（改訂版五の巻十四「鞍山製鉄所遠望」（詩））／「遼陽の白塔」（改訂版四の巻十二「忠霊塔巡り」）／「公主嶺」（改訂版五の巻十八「公主嶺の農業試験場」）／「鉄道愛護村」⇒「石森原案」のみ（改訂版三の巻八「楽しい慰安車」）
- *4 「原文対照国語読本の教材」の序文には「当地の子供には、原文の方がびつたりひびくやうだ」との声が残されている。満州在住の子どもにとって、『満州補充読本』で親しんでいる満州の遺跡、事象等の描写に対する親和性は高いものであったことが推察できる。

付記 本研究は、JSPS科研費課題番号22k02557の助成を受けたものです。